

# 石川丈山



## 希代の漢詩人 石川丈山

石川丈山(1583~1672)といえば、江戸初期の文人として著名である。文人とは、どういう人かという「詩文・書画など、文雅なことに従事する人」「(広辞苑)」だという。

丈山は、儒学者であり、漢詩人であり、書家であり、茶人であり、造園家であった。どれ一つとして一流でないものはない。そのために「希代の隠士」といわれ、その小伝が「続近世畸人伝」に書かれている。奇人というのはかわりもの、変人の意である。どこが変わり者であったのだろうか。それは武士でありながら、欲しげもなく、その身分を捨て、漢詩人として、その一生を終えたことにある。

丈山の家系は、徳川氏に仕える安城譜代の家臣であった。先祖石川信貞の代に、安祥城主松平長親に従い、祖々父信治は松平清康に仕えて和泉郷(現和泉町)を所領し、祖父正信は松平広忠に、父信定は徳川家康に仕えてきた典型的な三河武士の一族である。

父信定没後、16歳の丈山は徳川家康に仕える。33歳の時、大阪夏の陣で、手柄を立てながら、軍令にそむいたことから、論功を受けることができず、それを契機に退官してしまう。そして35歳になってから、親友林羅山のすすめで、藤原惺かの門人になり儒学を学び、漢詩人としての第一歩をふみ出すことになる。

故国三州遠く

新居五岳につらなる

官を棄てて野趣に甘んじ

道を巻めて天真を抱く

わずかに小游が足れるを取り

すこぶる栄叟が貧を忘る

病を養いてなお跡を滅し

志をほしいままにして身を終んと欲す



老にいたるまで妻子無し  
誰かために鬼神あらん  
紛華何の悦ぶところぞ  
車馬一浮塵

この漢詩の中に、丈山の生きざまがうたい込まれている。「野趣に甘んじ」とは、自由の身になることであり、「天真を抱く」とは、いつわり飾らぬことである。自由で、いつわりのない生活をするのが、丈山の願いであったといえよう。

41歳から53歳まで広島に住み54歳の時、京都に帰り、相国寺畔(京都市 左京区田中野上町)の睡竹堂に住まう。この住居の書齋であったのが「学甫堂」である。ここから文人隠者としての生活が始まる。

丈山59歳、京都一乗寺の「詩仙堂」に移り、90歳で没するまで、約30年間ここに住まう。詩仙堂の庭園は、名庭として有名である。詩仙堂というのは、堂内の一室に中国の詩人三十六人の詩と小像をえがいて掲げたことによって名付けられたという。ここで漢詩集『覆醬集』(ふしょうしゅう)が編せられる。その巻頭の詩が「富士山」である。

仙客来り遊ぶ雲外の嶺  
神龍栖み老ゆ洞中の淵  
雪は丸素の如く煙は柄の如し  
白扇倒にかかる東海の天



安城における丈山顕彰事業は、江戸時代の都築弥厚の薫風塚にはじまり、村上忠順の丈山旧里碑、渋谷良平、邸址、神谷義郎氏の学甫堂の移築復元(丈山文庫)和泉町内会の銅像・故居遺址之碑、と受け継がれてきたが、平成8年の愛知ふるさとづくり事業として「丈山苑」が和泉の地に建設された。

苑内の建物は、詩仙堂を彷彿とさせる木造建築で「詩泉閣」と名付けられ、邸内は狩野探幽の「画」・丈山の「賛」と伝えられる三十六詩仙の詩仙堂額(複製)をはじめ、隷書体の書幅などが掲げてある。庭園は丈山の作庭した詩仙堂、東本願寺の涉成園(きこく邸)、田辺の酬恩庵(一休寺)の三庭園をイメージし、唐様庭園、回遊式池泉庭園、枯山水庭園を組み合わせた本格的な庭園で、開苑以来多くの市民や地方からの来訪者を迎えている。

(広報あんじょう「安城の人物史」1981.1.1)他 神谷素光

# 石川丈山の生涯

## 三河武士の子として

戦国の世を統一しようとした織田信長が本能寺の変で討たれた翌年、天正11年（1583年）に、丈山は生まれました。石川家は源氏の流れをくみ、代々松平家の譜代として武勇の誉れ高い家柄で、丈山は、三河武士・石川信定の子として、三河国和泉郷（現在の安城市和泉町）で生まれました。

丈山は幼い時から気丈なところがありました。2歳のとき、隣村東端の八剣神社の祭りを見にいったことを、後に思い出話として母に語ったとか、4歳の時、野寺の本証寺までの往復3里（約12キロ）を歩いたとか、5歳でほうそうを患った時、膿で鼻がつまり、自分から頼んで竹刀で切り開いてもらい、出血が多かったものの、少しも泣かなかった・・・などが伝えられています。

丈山の少年時代は、織田信長にかわり豊臣秀吉が天下を統一したころです。7歳の時、石川家の主君家康が江戸に移ったため、丈山も父信定に伴われて江戸に行きました。丈山はこの時以来、和泉の地を離れています。13歳の時、早くりっぱな武士になりたいと父に願いですが許されず、やむなく夜ひそかに抜け出して、祖父の弟がいる忍城（埼玉県）を訪ね、意中を打ち明けて武士としての修行をしました。

## 家康に仕える

16歳の時に、父を失いました。その境遇に同情した母方の親類松平正綱によって、丈山は家康の近侍として仕えることになりました。以後33歳までの17年間、家康に仕えています。

18歳の時、関が原の戦いにも従軍しました。いよいよ家康の天下となってからも、その信任は厚く、ある時は京都に、ある時は伏見に、またある時は駿府に、江戸にと常に家康に従いました。宿営中にわずかな物音でもすぐ目覚めたという丈山を、家康は寝所のそばに宿直するように命じたほどでした。

20歳の時、親友が人と争って傷つけられ病に倒れたことがありました。丈山は、昼は出仕し、夜は看病にと眠らないこと21日間にも及んだといえます。

25歳の時、駿府城で大火事が起きました。後の水戸藩主・徳川頼房がまだ5歳の時で、乳母が頼房を抱いて逃げようとするものの、火勢が急で逃げられず泣いていました。これを聞きつけた丈山は、衣に水をかけ火の中に飛び込み、二人を救い出しました。

## 人生の転機・大阪夏の陣

元和元年（1615年）、丈山が33歳の時、大阪夏の陣が始まりました。前年の冬の陣で徳川方は勝利を収め和議が成立。家康は、いったん駿府に戻りましたが、4月4日、再び大阪へ出陣しました。この時、家康に従った丈山は、長年参禅していた駿河・清見寺の説心和尚に奮戦を誓って出発し、18日には、二条城に入りました。



ところが丈山は、ここで腸チフスにかかってしまい病の床についてしまいました。5月5日、江戸にいる母から手紙が届きました。「代々徳川家に仕えておりながらこの度の戦で功も立てないということがあれば、母は再びお前には会わない」という厳しいものでした。この時すでに、家康が二条城を出発していると聞いた丈山は、人の助けをかりて起き上がり、籠に乗り家康の後を追いました。岩清水八幡まで来たところ、口の渴きを覚えて水を3杯飲んだところ、とたんに苦しみがおさまりました。翌6日、豊臣方との激戦が始まりました。この時、家康は勝ち戦を信じ、できるだけ損害を少なくするために「先陣争い(一番乗り)」を厳しく禁じました。

丈山は悩みました。説心和尚への奮戦の誓いと、母の手紙による激励。にもかかわらず一番乗りの禁止。苦しみぬいた末、丈山は意を決して、7日明け方、ひそかに家康の下をぬけ出し、家来3人を引き連れて大阪城へ向かいました。城の中からは弾丸や矢が激しく飛んできます。丈山は傷をうけながらも、ひるまず進み、ついに敵方の大将を討ち取りました。武勇を誉めたたえる声に対し、丈山は「本日の先陣争いは、祖先の名をはずかしめないためにしただけだ」と答え、少しも手柄を誇ることはありませんでした。

先陣争いの軍令を破った理由で責任を取った丈山は、蟄居(部屋に閉じこもり 謹慎すること)しました。かねてから「戦に功をたてて生還できれば隠退する」ともらしていた丈山は、その意思を貫き、髪をそって京都の妙心寺に入ってしまった。

## 学問を修める

34歳のとき、妙心寺にいた丈山のもとへ、江戸の母が病気との知らせが届きました。丈山はさっそく江戸へ行き、母の看病に尽くしました。看病の合間にも中国最古の詩文選集「文選」(西暦530年ごろ完成し、約1000年間の760編を収録したもの)を読み続け、わずか30日で訓読したといえます。

武士を捨てた丈山はもう一度家康に仕えるようすすめる周囲の声をよそに、一心に学問に励みました。読書する時には、眠気ざましに手ぬぐいをぬらして頭にのせ、昼夜をいとわなかったといえます。

35歳の時、旧知の友・林羅山のすすめで、近世儒学の始祖・藤原せいかに会い、いままでの禅を中心とする学問から儒学の世界に学問の幅を広げました。しかし、その生活は苦しく老いた母親も気がかりでした。親類の者も、しきりに仕官をすすめ、武勇にすぐれ儒学を修めた丈山のもとには、諸大名からも、いくつかの引き合いがありました。

36歳のとき、本多出羽守のすすめで、はじめて紀州の浅野侯に仕えましたが、わずか数カ月で京都に帰ってしまいます。その生活は苦しく、老母を伴いながらも、また悠々自適な生活を送りました。

## 母への孝養

丈山41歳の時、同郷の出身で交遊の厚かった京都所司代板倉重宗は、丈山の窮乏を憂い、紀伊から広島へ転封した浅野侯の再び仕えるようにすすめました。丈山は「わたしの素志に反しますが、老母に孝養を尽くすために」とこれを受入れました。友人には「母が天寿を全うすれば自分は必ず退官する」といい残し、母を伴って広島へ行きました。

広島での丈山は賓客として手厚い待遇を受け、十分に母への孝養を尽くすことができました。53歳の時、母が亡くなると、丈山はかねてからの志望通り辞職を願い出ますがなかなか許されません。翌年、意を決して、病氣療養のため有馬温泉へ行くと称して、広島を去ってしまいます。14年間に及んだ広島での生活でも、丈山は日夜学問や武術に励んだといっています。

## 隠棲の地・京都詩仙堂

京都に戻った丈山は、相国寺のそばに「睡竹堂」という居をかまえ、隠棲生活を始めます。翌年、56歳になった丈山に所司代板倉重宗は、再び幕府に仕えるようにすすめますが、丈山は「母の没した後は、引退の志を遂げる」と辞退しています。睡竹堂に住むこと4年、この間、終生の適地を求めていた丈山は、京都の北東、比叡山西麓の一乗寺村に、その地を見つけました。丈山はここを「凹凸か」と名付け、後に、「詩仙堂」とも呼んでいます。丈山59歳の時、詩仙堂は落成。その後、没するまでの約30年間、ここで隠棲生活を送りました。



丈山は、まず、ここに掲げるべき中国の36人の詩人とその詩の選定を行い「三十六詩仙」と名付けて壁面の四方に配列しました。詩仙堂での生活は、質素な中でも風雅な暮らしぶりでした。丈山60歳の時には、駿河・清見寺の説心和尚と詩仙堂で20年ぶりの再会。翌年には林羅山親子が堂を訪れています。63歳の時、詩仙堂での日常生活のおきてとして「六忽銘」を作っています。これは、



火を粗末に取り扱うな  
盗賊を防ぐことを忘れるな  
朝早く起きることをいとうな  
粗食をいとうな  
儉約と勤勉を変えてはならぬ  
掃除をおこたるな

の6つで板に彫って台所に掲げました。この裏には「既飽」の文字があり、腹八分目をよしとせよという意味で、どれも丈山の生活ぶりをかいま見ることができます。

## 漢詩と隸書の大家に

丈山は特に漢詩にすぐれ、師の藤原せいかは丈山の詩才を高く評価して「この人は 必ず詩家の宗となるであろう」と感心したといわれています。また、丈山54歳の時には、朝鮮の使者と筆談を交わしており、丈山は「日東の李杜なり」と賞賛されました。京都所司代板倉重宗は、丈山のすぐれた詩が散逸するのを心配し、いやがる丈山を説きふせて詩集を編さんさせています。これが、『覆醤集』(ふしょうしゅう)で、上中下3巻からなっています。この中にある「富士山」の詩は特に有名で「仙人が来て遊ぶといわけている 富士山は、白ぎぬのように雪をいただいて、ちょうど白い扇が逆さまにかかっているようだ」とよんだものです。

### 富士山

仙客来り遊ぶ雲外の嶺

神龍栖み老ゆ洞中の淵

雪は丸素の如く煙は柄の如し

白扇倒にかかる東海の天

丈山は書にもすぐれ、特に隸書は有名で、林羅山も「このような隸書の名手は本邦初めてである」と賞賛しています。丈山70歳の時、堂を訪れる人もようやく多くなり、いちいち断るのもわずらわしいからと、所司代板倉重宗に故郷の三河国和泉郷への転居を願い出ますが、許されませんでした。これは、前年に由井正雪の陰謀事件があり、幕府の浪人に対する取締りが厳しくなったため、重宗が丈山の身に不測の災いが及ぶのを恐れたための措置といわれています。



丈山は、作庭家としても有名で、隠棲生活を送った詩仙堂の庭園のほか、京都東本願寺別邸の涉成園や、京都田辺の一休寺の庭園などが丈山の作といわれています。また、茶の道にも精通しており、煎茶の元祖であったともいわれています。

丈山は80歳の時、「三十六詩仙」の肖像を描いた狩野探幽に自分の寿像を描いてもらっています。また、晩年は戦のことは口にせず、聞かれても「老衰して記憶がない」と答えています。外出する時には必ず召使いに長刀を持たせ、常に座敷には刀や弓矢をおいて武士たることを忘れなかったといえます。

寛文12年(1672年)2月、眼を患い、3月床につき、生涯独身を通して、5月23日、90歳の生涯を詩仙堂で全うしました。

(広報あんじょう特集 92.1.1) ※写真は現在の「丈山苑」を掲載しています。